

自閉症児の「独語の低減」を目的にしたセルフマネジメント訓練

ー通常学級へのインテグレーションを目指した通級制情緒学級の活動ー

○廣瀬由美子
(国立特殊教育研究所)

・ 加藤哲文
(つくば国際大学)

・ 小林重雄
(吉備国際大学)

I はじめに

1995年に米国で制定された全障害児教育法は、わが国の特殊教育に少なからず影響を与えている。学校現場にはノーマライゼーションの理念が浸透して、障害児を通常学級に入級させることが、統合教育の実現であるという風潮(山口1990)や、障害児の保護者がわが子の就学を養護学校より通常学級へ、それが無理なら特殊学級を強く希望する傾向がある(位頭, 1996)ことも、指摘されている。このことは、保護者が「統合・交流教育において、少しでも多くの時間を健常児と共に過ごすことで、わが子の発育を促したい」(高橋, 1992)と考えているからであろう。

M校の情緒障害特殊学級(以下情緒学級と略す)も統合教育を希望する保護者の強い要望で4年前に新設された特殊学級である。在籍児の中には精神発達遅滞を伴う自閉症児がいる。

そこで本研究では、自閉症児の学校場面におけるインテグレーションに関する知見を得るために、対象児(S児と略す)の学校場面における環境アセスメントを実施した経過と、その結果、問題となっていたS児の独語を低減させることを目的に、応用行動分析理論の枠組みを用いて指導した過程について分析・検討する。

II 研究の目的

- 1 小学5年自閉症S児の、学校場面における環境アセスメントを実施し分析する。
- 2 環境アセスメントの結果から、S児の集団参加を困難にしている問題の、行動アセスメントを行い分析する。
- 3 S児の問題行動の低減を目的にし指導計画をたてて遂行し、援助をコントロールからセルフマネジメントへの転換といった観点で展開を試みる。

III 研究方法

1 対象児

M小の情緒学級に在籍し、精神発達遅滞を伴う5年自閉症男子である。S児は、理解言語は比較的良好であるが、表出言語は単語レベルの要求がある程度で、

エコーイックな反応や独語が多く、言語によるコミュニケーションが困難な児童である。

2 標的行動

S児の指導ターゲットを決定するために、学校場面における環境アセスメントを実施した。その結果から問題となっている「独語の低減」を標的行動とした。

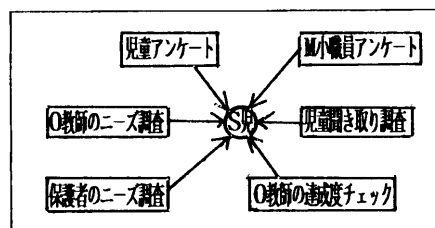


Fig.1 環境アセスメントの概要

3 「独語の低減」を目的にした研究

(1) 手続き

① 独語の機能的アセスメント

S児の独語の状態を調べることを目的に、情緒学級と通常学級の2場面で、種々の課題と好みの活動を様々な条件設定で行いビデオ録画を実施した。インターバル記録法により、全て60セル中の独語や不適切行動の出現率を求めた。その結果から、S児の独語は明確な機能をもたない、習慣化されたステレオタイプの行動であることが推定された。

② ベースライン記録の実施

情緒学級と通常学級のどちらも、10分間S児が漢字練習をしている場面をビデオ録画で記録した。その際情緒学級担当者はS児の視界に入っているが、離れた場所にてS児に関与しない状態で観察した。ビデオ記録から、独語と課題逸脱行動の出現率をインターバル記録法でチェックした。独語の状態は、「鼻唄」「鼻唄以外の音声」の2種類に、課題逸脱行動は、「空書」「空笑」「鼻ほじり」「鉛筆噛み」「顔の形態模写」「指のフラッピング」「離席」と定義し、それぞれの出現率を求めた。

③ セルフマネジメント訓練の実施

セルフマネジメント訓練は、情緒学級と通常学級場面で実施した。訓練デザインは、Fig. 2の通りである。まずS児が、自分は今喋っているのか否か、ビデ

オ映像やテープレコーダーのモニタリングから弁別する訓練を行った。弁別訓練は情緒学級場面でのみの指導だったが、S児に○か×のカード、あるいは両方のカードを持たせ、編集ビデオ映像を見て自分が喋っている時は×カードを、喋っていない時は○カードを、テレビ脇のポケットに選択して入れる反応の形成を試みた。

モニタリング訓練終了後、S児が喋らない状態を理解した上で、「喋らないで勉強します」という発言をさせて言行一致訓練を実施した。言行一致訓練では、強化刺激にS児の大好きなお菓子を導入し、トークンエコノミー法とレスポンスコスト法を併用し、結果は言行一致率と弁別正反応率とした。

言行一致訓練は情緒学級と通常学級で実施し、プロープによって般化効果を確認した。

(2) 結果および考察

S児の独語に関して、機能的アセスメントを実施した結果、独語は習慣化されたステレオタイプの行動であることが推定された。独語指導を開始する前の3回のベースライン記録では、情緒学級および通常学級のどちらも、「鼻唄」と「鼻唄以外の音声」を合わせた独語の出現率は、60%~90%あり、場所による差はほとんどなかった。また、担当者が独語を注意した時のS児の反応から、S児は自分が今喋っていたのかい、意識していないあるいは理解していないように推測された。そこで、情緒学級で9場面を使ってS児が喋っているか否かの弁別訓練を実施した結果、ビデオ映像やテープレコーダーによるモニタリングで弁別が可能になった。しかし、S児の場合ビデオ映像では、複数の要素からなる刺激の一つに注意が向きやすい刺激過剰選択傾向にある(山本, 1997)ことが明らかになり、聴覚刺激のみのテープレコーダーによるモニタリングの方が、弁別訓練に有効であることが明らかになった。

2場面実施したが、各訓練場面では弁別正反応率も高く、訓練を重ねることで言行一致率も早い段階で到達目標をクリアするようになった(Fig. 2)。

さらに、プロープを情緒学級で8回、通常学級で10回実施したが、テープレコーダーを使用した場合は、どちらの学級も独語の出現率が20%台と低くなり、独語をコントロールする手がかりは、テープレコーダーの存在が有効であることが明らかになった。現在S児は、9分程度自分で独語をコントロールできるようになっている。

IV まとめ

独語の低減を目的に実施したセルフマネジメント訓練では、一定時間はコントロールが可能になったが、その効果も限られた条件下であり、この意味から考えるとS児の独語行動は、周囲の児童に迷惑をかける問題行動のままである。今後の課題は、S児の独語指導の継続と同時に、学校全体で取り組むためのシステムや支援体制をどう構築していくかが、インテグレーションの推進に結びつくと考えられる。そのためにも、特殊教育担当者が障害児の指導効果をあげ、その効果を通常学級に拡大し、維持させていく試みや実践を系統的に実施していくことだと考える。

V 参考文献

- 位頭(1996) 交流・統合教育の可能性と限界 SNEジャーナル第1号, 159-162.
- 高橋(1992) 保護者の統合・交流教育に関する意識調査 日本特殊教育学会第30回大会発表文庫, 728-729.
- 山口(1990) 学校教育におけるノーマライゼーション 発達障害研究11(4), 257-265.
- 山本(1997) コミュニケーション行動の一般化とその自発的使用 応用行動分析学入門, 学苑社, 122.

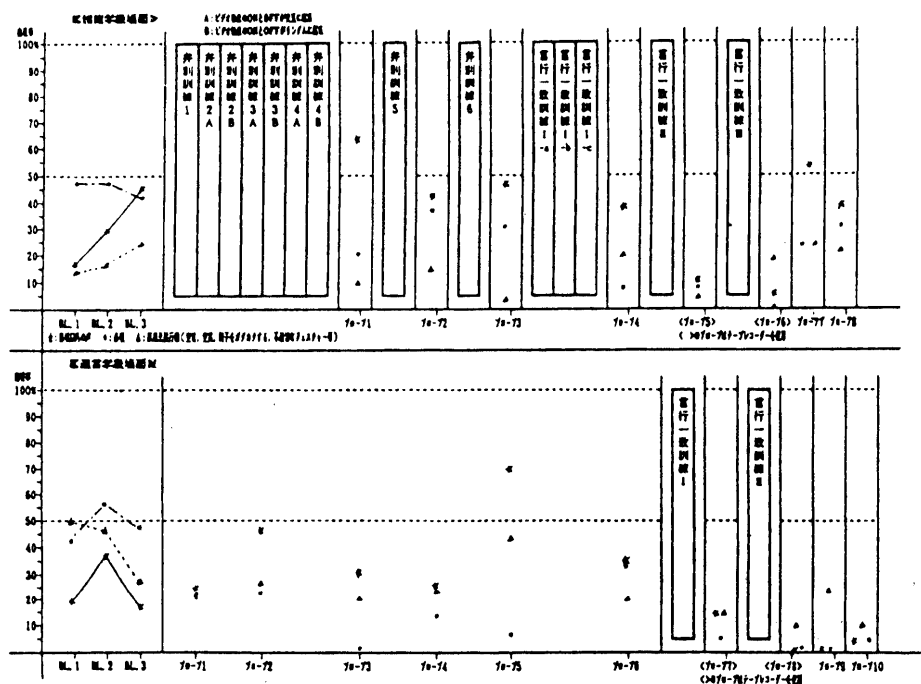


Fig. 2 独語指導デザインと指導結果